G-2

V-*e*-te-i-ru 形式のアスペクト解釈について*

高橋英也（岩手県立大学），江村健介（岩手県立大学）

要旨

相助動詞テイル（以下、テイル）は、前接する動詞のアスペクト性を診断する方法の一つとして広く知られており、意味的には行為の進行（進行相）と行為の結果状態の継続（結果相）におおまかに分けられる。

本発表では、まず、「その子どもは漢字を上手に読めている。（進行相）」や「その論文はよく書けている。（結果相）」のような、可能動詞＋テイルが示す２種類のアスペクト解釈に対する竹沢 (2015) の分析を概観し、その妥当性を検証しつつ残された問題点を指摘する。その上で、分散形態論の基本的想定を踏まえた機能範疇の階層システムに関する一般理論に基づいて、接辞 *e* を伴う述語の形態統語構造を提案し、V-*e*-te-i-ru 形式のアスペクト解釈を構造的に導出すると同時に、言語使用で直面する「接辞 *e* を介した可能動詞・中間動詞・自他交替の連続性」に関する洞察を自然に捉えることを試みる。

1. はじめに

(1) 相助動詞テイル/-te-i-ru/（以下、テイル）は、前接する動詞のアスペクト性を診断する方法の一つとして広く知られており、意味的には、行為の進行（進行相）と行為の結果状態の継続（結果相）におおまかに分けられる（金田一 1950, 工藤 1995, 森山 1988, 三原 2004 など）。

(2) テイルの機能

a. 「過程」「結果持続」「維持[1]」の 3 つの枠を含む「持続」（森山 1988）

b. 「動作持続」「結果持続」「効力持続[2]」（工藤 1995）

(3) 状態動詞

a. 公園にベンチがある /*あっている　　b. 公園に子どもがいる /*いている[3]

(4) 可能動詞（子音語幹動詞＋*e*）＋テイル（寺村 1982, 井島 1991 など）

a. その子どもは漢字を上手に読めている　　b. その論文はよく書けている

2. 竹沢 (2015)

(5) タイプ１

a. うちの子は泳げている　　b. あの選手はよく動けている　　c. あの役者はうまく台詞を言えている

(6) タイプ２（「自動詞型」の可能動詞＋テイル）

a. この論文はよく書けている　　b. この雑巾はきれいに縫えている　　c. この帯は上手に結べている

（竹沢 2015: 266-267）

(7) タイプ１：主語が有する能力の表出としての行為の継続（進行相）

a. 主語における泳ぐ能力の所有状態が、一時的な動的活動を表す「泳げている」において、実際の行為として表出しているもの

---

* 本研究は、科研費（基盤研究 (C) 17K02700「日本語を中心とした動詞句階層構造の統合的研究」、同 19K00554「可能動詞化の方言横断的多様性とその知識の獲得に関する理論的・実証的研究」）の助成を受けている。

[1] 「過程」と「結果持続」の中間的な分類であり、動きの結果が主体的に保存されている状態を指す。

[2] 「太郎は卒論を（既に）書いている」のような、伝統的に「完了」（工藤 (1995) の「パーフェクト」）と呼ばれてきたものを指す。

[3] 先行研究でも指摘されているように、関西方言においては「いる＋テイル」が認められる。

b. テイルの付加に伴うタイプシフトにより「静的状態」から「動的活動」へ変換された事象叙述文

(8) タイプ２：活動の結果として生じた対象の状態の継続（結果相）

a. 誰かによる「書く」活動の結果として出来上がった論文における「良い」結果状態の継続

b. 対象の性質を表す属性叙述文

(9) a. [$_{TP}$ うちの子$_i$ [$_{VP}$ PRO$_{(Agent)i}$ 泳げ] ている]　　b. [$_{TP}$ この論文$_i$ [$_{VP}$ $t_{(Theme)i}$ 書け] ている]

(10) 作成・加工動詞[4]に対する可能接辞 *e* による脱使役化（動作主の抑制による自動詞化）

a. その線は真っ直ぐに引けている　　b. この彫刻は上手に彫れている　　c. その模型はよく作れている

（竹沢 2015: 277）

(11) 動作主の非顕在化

a. （*太郎には）この論文がよく書けている　　b. （*花子には）雑巾がきれいに縫えている（竹沢 2015: 272）

(12) 状態変化事象

a. *その模型はよく使えている

b. *そのジュースはおいしく飲めている（cf. うちの子はそのジュースをおいしく飲めている（タイプ１））

（竹沢 2015: 276-277）

(13)「ある評価基準における期待されるあり方」としての結果状態[5]（川端 2015）

a. この論文は ??(よく) 書けている　　b. この雑巾は ??(きれいに) 縫えている

(14) 竹沢 (1991) の一般化：主語が内項を束縛している場合に結果相解釈が得られる[6]。

3. 竹沢 (2015) の問題

(15) 竹沢 (2015) の分析は、可能動詞化と自動詞化の繋がりを指摘した点において示唆的である一方、より広範な V-*e*-te-i-ru 形式のアスペクト解釈を射程に収められる一般性の高い説明が望まれる。

3.1. 中間動詞[7]

(16) a. 総称的動作主による行為の実現を可能にする対象についての属性叙述

b. 対象が表層主語として生起する自動詞文

c. 子音語幹動詞に対する接辞 *e* の後接

(17) a. そのセーターは（洗濯機で）洗える（/ara-*e*-ru/）　　b. そのペンは（滑らかに）書ける（/kak-*e*-ru/）

(18) a. そのウールのセーターが/は 洗濯機で 洗えている　　b. そのペンが/は 滑らかに 書けている

---

[4]「ご飯がおいしく炊けている」「肉が柔らかく煮えている」のような料理動詞も同様の扱いとなろう。

[5] 属性叙述表現としてのタイプ２において、「よく」「きれいに」といった付加詞の生起が好まれる点は、「T シャツが ??(表裏逆に) 着てある」のようなテアル構文や、The book reads *(easily).のような、英語における中間動詞と並行的である。

[6] 竹沢 (1991) では、表層的な自動詞文だけではなく、「太郎$_i$は帽子を（頭$_i$に）かぶっている」のような譲渡不可能所有関係を表す事例に対しても並行的な説明を与えている。

[7] 日本語における「中間動詞」に関しては、寺村 (1982), 影山 (2001) など多数の先行研究において、様々な定義が試みられている。本発表では、差し当たり (16) の諸特徴を示す述語形式を想定している。

(19) 事象を時間軸上で切り取る「〜ているところ」(金水 2000, 影山 2009)

a. そのウールのセーターが 洗濯機で 洗えているところを見た (＝洗濯機でウールのセーターが洗われている場面)

b. そのペンが 滑らかに 書けているところを見た。

(20) a. そのキャビネットが 重ねて 置けているところを見た。

b. その傘が きれいに たためているところを見た。(cf. その傘が 簡単に たためているところを見た。)

(21) a. 太郎は ?*数学が / 計算が よくできている (竹沢 2015: 271)

b.「活動が想起できないため、(中略) テイルによる強制がしにくいためであると考えられる。」(竹沢 2015: 271)

(22) a. うちの上司はかなり話せ(*てい)る。(cf. 話せる上司)　b. その男はかなり使え(?てい)る。(cf. 使える男)

a' 太郎は上司に/と話した。　b'. 太郎はその男を使った。

3.2. 非動作主他動詞

(23) 無標の自動詞形＋派生接辞 *e* による他動詞 (V_{intr}-*e*) は、非動作主主語を認可し、(語彙による多少の出入りはあるものの) そのテイル形は結果相解釈を許す傾向にある。

(24) a. 叶える (叶う)、従える (従う)、進める (進む)、揃える (揃う)、立てる (立つ)、違える (違う)、退ける (退く)、並べる (並ぶ)、緩める (緩む)・・・

b. 長年の夢を叶えている、(決勝に駒を) 進めている、(人数を) 揃えている、(表情を) 緩めている・・・

(25) 腰を痛めている (痛む)、腰を屈めている (屈む)、首をすくめている (すくむ)、顔を歪めている (歪む)

(26) a. 太郎は (胸に) バッジを付けている。　a'. [$_{TP}$ 太郎$_i$ [$_{VP}$ (胸$_i$に) バッジを 付け] る]

b. 警察は (ある男に) 目星を/見当を/*目標を 付けている

(27) 太郎は、次郎が屋上に (あっという間に / 高々と) 旗を立てているところを見た。

a. 旗を立てる過程の進行 → 進行相　b. 旗が立てられた状態の継続 → 結果相

(28) (募金を/注目を) 集めている (/atsum-*e*-ru/)

(29) 事象の非限界性を診断する「〜の間」テスト (三原 2004 など)

a. 仙台・大宮の 1 時間、座席を違えた[8]　b. それから少しの間、表情を緩めた　(cf. 1 時間、本を読んだ)

(30) a. 車掌はその乗客が指定席を違えているのに気づいた。

b. その酒屋はいつも全国各地の日本酒を揃えている。

c. その店はいつも店頭にオススメ商品をたくさん並べている。

(31) 「意図性」の有無

a. (何もせずとも/*わざと) 大きな夢を叶えた　b. (自然に/わざと) 表情を緩めた

[8] いわゆる設置類の動詞 (早津 1989, 田川 2002) の特性として指摘されてきた、「1 週間、新刊図書を店頭に置いている」に見られるような結果状態の焦点化ともなんらかの関係があるかもしれない。

4. 分析

(32) 目標：「接辞 *e* を介する可能動詞、中間動詞、自他交替の連続性」を統一的な形態統語論の下で定式化し、V-*e*-te-i-ru 形式のアスペクト解釈を構造的に導出する。

4.1. 理論的想定

(33) 分散形態論 (Distributed Morphology) の基本的想定（Marantz 1997, 2001 など）

a. Root Hypothesis：語はもともと範疇未指定で、範疇未指定の語根√Root と v などの機能範疇主要部が統語的に併合することで決定される。

b. Single Engine Hypothesis：語形成を含む全ての構造は統語論で形成される。

c. Late Lexical Insertion：語彙挿入は Spell-Out 後に PF で起こる。

(34) a. 外項と内項は Voice と'small' v（動詞化素）によってそれぞれ認可される (Kratzer 1996, Basilico 2008 など)。

b. $[_{VoiceP}$ EA $[_{vP}$ IA √Root v] Voice$]$[9]

4.2. Get 仮説に基づく接辞 *e* の形態統語論

(35) a. そのロープは（経年劣化で）突然 切れた。 （反使役化）

b. そのロープは（ナイフで）きれいに 切れた。 （脱使役化）

c. その素材のロープは すぐ 切れる。 （中間動詞）

d. 太郎は（素手で）そのロープを 切れた。 （可能動詞）

(36) a. ２本のロープが繋がった（自動詞）

b. ２本のロープを繋いだ （他動詞） b'. ２本のロープを繋げた（他動詞/可能動詞）

(37) a.（「つけられない」の意味で）「電気つけん」(3;3) b.（「届けられない」の意味で）「届けなかった」 (3;11)

(38) *eru* 他動詞は、五段動詞の可能形と同一形態で終わる動詞であり、可能形と混同されやすい、まぎらわしい動詞であると考えられる。第一言語における使用で、可能の文脈で *eru* 他動詞が用いられるのは、他動詞と可能形の混同による可能性がある。（中石 2016: 82）

(39)「四段動詞がまず先にあって、下二段活用が意味の異なりを示すために後から作られた可能性」（青木 2010: 56）[10]

(40) 接辞 *e*：「エル」が文法化した機能範疇 Get として、「獲得、完遂、到達」というアスペクト特性に関係する意味論的概念と結びつき、主題役（Experiencer など）付与によって主語を認可する（Nakajima 2011, 2014, 高橋・江村 2015, Takahashi and Emura 2019）[11] [12]

(41) 接辞 *e* を伴う可能形式の解釈は、機能範疇 Get における「獲得、完遂、到達」といったアスペクト特性に基づき、動詞句として表出されるイベントの意味論において与えられる[13]。

---

[9] 動詞句の階層システムにおける Voice-Cause bundling の問題 (Pylkkänen 2008, Aoyagi 2017, forthcoming a, b) には立ち入らず、ここでの外項とは典型的な動作主を想定することとする。

[10] この意味において、日本語の文法における機能範疇 Get の出現は、いわゆる通時的な語幹増加 (釘貫 1996）の様相の反映と見ることができるかもしれない。

[11] 伝統的な「エル説」「Get 仮説」については、石田 1958, 吉田 1973, Washio 1989-1990, 鷲尾 2005, Whitman 2008 などを参照されたい。

[12] 受け身ラレの形態統語論における機能範疇 Get の役割については 高橋・中嶌 (2019) を参照されたい。

[13] 可能動詞の意味論をアスペクト特性に還元する方向性は、例えば、九州地方におけるウル表現や補助動詞キルを用いた形式が段階的に可能動詞化を経ている事実（渋谷 2006）とも符合する。

(42) [$_{GetP}$ $DP_{i\ <Experiencer\ など>}$ [$_{VoiceP}$ $e_{i<Agent>}$ [$_{vP}$ $DP_{<Theme>}$ √Root v] Voice] Get][14]
[$_{GetP}$ 太郎$_i$ [$_{VoiceP}$ e_i [$_{vP}$ ロープを √*kir* v] Voice] *e*] （太郎がロープを切れる）[15]

(43) 下一段活用の「つなげる」と五段活用の「つなぐ」の意味的差異（「つなげる」における強い結果含意）
a. 手と手を つなぐ/*つなげる　　a'. 犬を鎖で つなぐ/*つなげる
b. 敗戦を<u>次の勝利に</u> つなげる/*つなぐ　　b'. レポートを<u>卒論に</u> つなげる/*つなぐ

4.3. V-*e*-te-i-ru 形式のアスペクト解釈[16]

(44) a. VoiceP と GetP は事象構造における「過程 (process)」と「結果 (result)」の領域にそれぞれ対応する。
b. テイル形の解釈はそのスコープ内にある VoiceP と GetP の「可視性」により決まる。

(45) Remerge: A weak head α that is already in computation may merge again with a non-weak head β iff (i) β is introduced into derivation immediately after α, and (ii) either α or β lacks phonetic features. (Nakajima 2014: 10)

(46) 弱い主要部 ＝ 指定部を生成しない主要部

(47) a. [[$_{GetP}$ ロープ$_i$ [$_{vP}$ t_i √*kir* v] *e*] テイル] (*e*: Get remerged with Voice) （ロープが切れている：反使役化）
b. [[$_{GetP}$ 論文$_i$ [$_{vP}$ t_i √*kak* v] *e*]テイル] (*e*: Get remerged with Voice) （論文はよく書けている：タイプ２）

(48) a. [[$_{GetP}$ 太郎$_i$ [$_{VoiceP}$ e_i [$_{vP}$ ロープを √*kir* v] Voice] *e*] テイル][17] （太郎がロープを切れている：タイプ１）
b. [[$_{GetP}$ ロープ$_i$ [$_{VoiceP}$ $PRO_{(arb)}$ [$_{vP}$ t_i √*kir* v] Voice] *e*] テイル][18] （ロープが簡単に切れている：中間動詞）

(49)「太郎は（本人は何もせずとも）最終的に自分の夢を叶えた」における主語「太郎」は、制御性（意図性）を欠く非動作主として認可される (cf. 三宅 2017) 。

(50) [$_{GetP}$ 太郎 [$_{vP}$ 夢 √*kana* v] *e*] (*e*: Get remerged with Voice) （太郎は夢を叶えている）

5. 結論

(51) a. 竹沢 (2015) の分析は可能動詞化と自動詞化の繋がりを指摘した点において示唆的である。
b. 語彙分解に基づく接辞 *e* の形態統語論により、「接辞 *e* を介する可能動詞、中間動詞、自他交替の連続性」が構造的に定式化され、その帰結として V-*e*-te-i-ru 形式の示すアスペクト解釈が自然に捉えられる。

主要参考文献

青木博史 (2010)「第一部 可能動詞の派生」『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房.

Aoyagi, Hiroshi (forthcoming a) "On the peculiar nature of double complement unaccusatives in Japanese," *Journal of Japanese*

---

[14] Voice 指定部に生起する (可能動詞化の入力となる動詞の外項である) e_i は、Get 主語である DP_i と結び付けられる何らかの空範疇であると仮定する。

[15] ラ抜き言葉の問題を含む可能形態素ラレの扱いについては、紙幅の都合上論じることが出来ない。ここでは、例えば「太郎が大盛りのカレーを食べられる。」が、高橋・江村 (2015, 2016), Takahashi and Emura (2019) で提案されている (i) のような動詞句構造において分析される可能性を示唆するに留めたい。
(i) [$_{GetP}$ 太郎$_{(Experiencer)}$ [$_{VoiceP}$（太郎$_{(Agent)}$）[$_{vP}$ 大盛りのカレー √*tabe* v] *ar*] *e*]

[16] 本発表の分析の下では、タイプ１とタイプ２は、動作主による行為の過程を表す VoiceP の有無に応じて、達成 (accomplishment)、到達 (achievement) としての事象構造を有するものとそれぞれ見なされる。

[17] ここでは、テイルの形態統語論には深く立ち入らないこととし、単純に動詞句を補部とする構造のみを仮定する。

[18] Stroik (1992) や Hoekstra and Roberts (1993) らに従い、中間動詞は音形を持たない含意的動作主を持つと仮定する。

Linguistics 36.
Aoyagi, Hiroshi (forthcoming b) "On the causative and passive morphology in Japanese and Korean," *Open Linguistics*. De Gruyter.
Aoyagi, Hiroshi (2017) "On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean," *Japanese/Korean Linguistics* 24. 1–14.
井島正博 (1991)「可能文の多層分析」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』149-189. くろしお出版.
影山太郎 (2001)『動詞の意味と構文』大修館書店.
影山太郎 (2009)「語彙情報と結果述語のタイポロジー」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』101-140. ひつじ書房.
影山太郎 (2012)『属性叙述の世界』くろしお出版.
川端元子 (2015)「アスペクト形式「ている」を伴う可能動詞句の意味と特性」『愛知工業大学研究報告』50: 46-52.
金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号. ［金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』(1976), むぎ書房に再録］
金水敏 (2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子(著)『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』33-70. ひつじ書房.
工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.
釘貫亨 (1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院.
Marantz, Alec (1997) "No Escape from Syntax: Don't Try a Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," *UPenn Working Paper in Linguistics* 4: 201-225.
Marantz, Alec (2001) "Words" ms., MIT.
三原健一 (2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
三宅知宏 (2017)「日本語動詞における「制御性（意図性）」をめぐって」森山卓郎・三宅知宏（編）『語彙論的統語論の新展開』117-134. くろしお出版.
森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
中石ゆうこ (2016)「縦断的発話データに基づく対のある自他動詞の習得研究」『県立広島大学人間文化学部紀要』11: 75-85.
Nakajima, Takashi. (2011) "On the Morphosyntactic Transparency of (S)ase and GETP," *Japanese/Korean Linguistics* 19: 199–214.
Nakajima, Takashi. (2014) The Formation of Predicate "Word": A Decompositional Approach. Handout. Keio University Colloquium.
Pylkkänen, Liina. (2008) *Introducing Arguments*. MIT Press.
渋谷勝己 (2006)「第 2 章 自発・可能」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂 (編著)『シリーズ方言学２ 方言の文法』岩波書店.
Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23: 127-137.
高橋英也・江村健介 (2015)「可能動詞の形態統語論に関する一考察：接辞 *e* の分布の観点から」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』236-241.
Takahashi, Hideya and Kensuke Emura (2019) "The Syntax of Potential Verbs in Japanese". *Proceedings of WAFL* 14: 317-328.
高橋英也・中嶌崇 (2019)「受け身「ラレ」の形態分離と繋属述語仮説」『日本英語学会第 37 回大会 Conference Handbook』.
竹沢幸一 (1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』59-81. くろしお出版.
竹沢幸一 (2015)「2 種類の「可能動詞＋テイル」構文」深田智・西田光一・田村敏広 (編)『言語研究の視座』266-279.
寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
Washio, Ryuichi (1989-1990) "The Japanese Passives," *The Linguistic Review 6*, 227-263.
Washio, Ryuichi (1995) *Interpreting Voice: A Case Study in Lexical Semantics*. Kaitakusha.
鷲尾龍一 (2005)「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』5-2, 3-20.
Whitman, John (2008) "The Source of the Bigrade Conjugation and Stem Shape in Pre-Old Japanese," In Bjarke Frellesvig and John Whitman (eds.), *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. 168-182. Benjamins.